

あなたは、「DX」という略語を 目にしたら何を想像しますか？

日本病院薬剤師会理事
福井大学医学部附属病院教授・薬剤長
後藤 伸之 Nobuyuki GOTO



最近、新聞やネットなどで「DX」という文字を見かける機会が増えました。私が「DX」から想像するものと言われたら、まずは40年前に使いこなしていたDXを思い出します。それは親に買ってもらった愛車トヨタ カローラII DX（デラックス）です。この愛車で大学への通学はもとより、部活動として所属していたラグビー部の合宿や遠征試合、さらに授業の合間を縫ってドライブなど年間走行距離は15,000 km超えでした。この車のボディカラーがポリバケツブルーだったので、友人達からは「動くポリバケツ」と呼ばれていたことを思い出します。

次に想像するのは、まだ病棟薬剤師が珍しい当時（35年程前）、私が担当していた消化器外科病棟で目にかかりました。副作用モニタリングのために担当患者の手書きのカルテを閲覧していた時に見かけた「Dx」の文字です。当初は何を意味する言葉かわからずに色々調べてみると「診断」を意味する英語Diagnosisに由来する医療用語の略語でした。あれ、xはどこから？と思い、さらに調べてみると長い英単語はよく後半をxで置き換えられるそうで、xには意味はないそうです。ほかにも医療用語の略語として脱臼（dislocation）、Dexter（デキスター；簡易血糖測定器またはそれによって測定された血糖値）も「Dx」と書くこともあるようです。

しかし、最近よく見かけるDXは、ご存知の方には言うまでもなく「Digital Transformation；デジタル・トランスフォーメーション」のことで、頭文字をとったDTではプログラミング用語（HTMLタグ<dt>）としてすでに用いられており、そこで、TransformationのTransformとほぼ同じように使われるのが、「cross」という言葉であり、この言葉は、英語圏ではよくアルファベットの「X」で表されるのでDXという略語が使われているようです。Transformationは「変容」という意味なので、DXを直訳すると「デジタルによる変容」となります。経済産業省では「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。」（経済産業省／DX推進ガイドライン、Ver.1.0、2018年12月）と定義しています。

先日、乗ったタクシーの車内CM動画で、元SMAPメンバーが上司役で出演するCMを見ました。上司役が部下役の男性に「やっぱりデラックスだよー」と言うんですが、それを聞いている男性は「また間違っている…」と心のなかで思います。終盤で上司役が「やっぱりデジタル・トランスフォーメーションだよー」と言うと、部下役は「直っている…」という内容でした。私のような中年管理職もいるのだな！と思わずクスッと笑っちゃいました。

薬機法改正（2021年8月1日施行）により、医療用医薬品添付文書が紙媒体での提供に代えて、電子的な方法による提供が原則となります。それに伴い包装や容器等に記載されたGS1バーコードをスマートフォンのアプリで読み取ることで電子化された最新の添付文書に簡単にアクセスができるようになりました。コロナ禍における新たな日常の実践とデジタル化推進を踏まえ、我々病院薬剤師も加速したDXの動きに乗り遅れることなく取り組むことが大切かと思えます。